

---

# 草の想い

R Y U

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

草の想い

### 【著者名】

IZUMI

### 【作者名】

RYU

### 【あらすじ】

殺し屋恵子と舞台役者のたまご陽子は東京で共同生活をしている

ついてない・・まつたくついてない、私はイラついている。まつたく昨日気合入れて学校休んで、美容院に行つて、さ・ん・ま・ん円もかけて金髪にしてストレートかけてトリートメントもバッチリしたつていうのに・・んーもつ愛子さんから頂いたこのバラの刺繡の入つたセーラー服もみんなみんな！　没収された　なに？この毛染めメ・メ・メンズ・よ・うナメテンのかノノヤロー　殺すぜーたいこります

「ねえねえ聞いたきいた」

「なに？」

「おケイよおケイ」

二人は生徒指導室のある3階のトイレで歯を磨いていた。ヨウチャンはグジュグジュツとうがいを済ませると、出口から進路指導室を覗いた。

「又やつちやつたらしいよ」

「また？」

目を丸くし　ため息をつくと、真紀は左の奥歯を磨きながら鏡越しにヨウチャンの様子を伺つた。

「髪の毛染めちやつてまつきんきんなんだつて」

ヨウチャンの一言に一瞬吹きそつになり、真紀はうがいをしてヨウチャンの後ろについた。

「で？」

「で」

ヨウチャンは、片手をつぶり進路指導室に指をやつた。

「何考えてんだか」

「さあ」

深刻な真紀に、ヨウチャンは明るく答えた

「色黒に金髪でしょー・・・合わないでしょーフツウ。せめて茶髪  
くらいにしてけばねえー・・・あ！ねえねえ真紀、ぜつたいおケイ  
の事だから眉毛黒だよ、黒、黒」

「うん」

「それ元気の制服つて水色だよ」

「うん」

「おかしくよねー」

「うーん」ヨウちゃんは恵子の姿を、あれこれ想像しては笑った。  
真紀は、頷いてはいたが内心恵子の処罰、進路指導室で何が起こう  
てこるのか気が気ではなかつた。しかし自分に何も出来る筈も無く、  
結局いつも通りヨウちゃんの聞き役となつた。

「せつたいぶつ殺す 何ではげ・・・つていうほじはげでないけど  
ブタ・・・つていうほど太つちゃいないけど 何でオヤジそつそう  
オヤジよ、なんでオヤジのいる前で着替えなきやならんわけ  
金とるぞ

金金金！

「田中終わつたか」

「つあ」

ジャージに片足を突つ込んだとき、奴は声をかけてきた。

「わるいわるい」

ハーもうハーー

「セクハラだ！セクハラ、セクハラ」

大きな叫び声に、ヨウちゃんは駆け出し指導室のドアを開けた。  
真紀もおろおろと指導室に向かつ。

5秒も立たないうちに、野次馬で指導室の前はびっしりと埋め尽く  
された。

真紀は廊下に取り付けてあるベンチに上がり、中の様子を伺つた。

私をかばうように、ヨウちゃんは学年主任の戸塚と言に争っていた。

真紀はただ見ていた…私を…

しばらくすると、他の先生達もやつてきた。

ヨウちゃんは、怒鳴りながら泣き出した。

野次馬達の視線は冷たいものとなり、統一された意思是先生達の言葉をせき止める。

いくら論理、理屈を考えようが意思の塊の前では、焦りという感情が駆け回るだけで覆す言葉など誰一人出てこなかつた。

戸塚は腕を組み目をつぶつっていた、日本人得意のだんまりである。これしか方法が無い、といつかオーソドックスに適切な対応なのかもしれない。

沈黙が続いた ヨウちゃんは私に抱きついた。私は野次馬に目をやると、真紀を探し睨み付けた

真紀は身をすくみベンチから降りると教室に向かつた

「真紀」

怒鳴り声が空氣を壊した

「いくよ」

私は、ヨウちゃんの頭を撫でながら真紀の元へ歩いた。野次馬も先生達も、誰も止めなかつた

教室をすぎ階段をすぎ二人はトイレに入った

「つかれた」

「ヨウちゃんありがとー」

一人の変わりように真紀は目をパチクリさせた。

「真紀あんた帰ろうとしたでしょ」

「つえ！あつ だつて」

「もうおケイいいって、分るわけ無いでしょ あんな遠くにいたら  
「え、見えてたの？」

「うん、怒鳴つてるとき何回かサイン送つたけど、真紀おケイばつか見てて全然気付かないんだもん。しまいには佐藤とか江原とかくるし、江原つるさいじゅん話し長いしさー」

「だから泣いたの」

「うん」

「ええ！」

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。武器よ武器、弱いものにはみんな よ・わ・い・の。ねえおケイ」

「うん? うんうん」

「おケイ知つてたの」

「うん」

「つていうわけでー、カラオケね」

「え」

「昨日で反省会も終わり、無事演劇祭は終わったわけで。今日から部活は休みなのだ」

「だからカラオケ?」

「うん? おケイなにしてるの」

「うん? おしつこ」

ヨウチヤンは、鬼の形相でドアをこじ開けてきた

「おケイ、あんた私のプリン食べたでしょう」

「うーん?... 食べた」

「真紀... どこいくの」

「きょ、教室」

「又逃げるの」

「え? だつて... 歌うのは...」

「私、聞くのはおケイ、払うの真紀いつも通りよ」

二人とも毎度の事ながらに、陽子の勝手なわがままに振り回され、3時から10時までマクドナルドにヨウチヤンの歌を聴き、最後は何時も、朝が来るまでマクドナルドで陽子の話に付き合わされていた。

親友だった考えるばつかの真紀にはヨウチヤンはまぶしく、考えないで動く私が羨ましくほつとけなかつた

ヨウチヤンもつらい事も楽しい事も一人がいないとダメだつた

…そして私も力になってくれる真紀そして…

人は誰しも怯える。

それが何時、何処でなど私には判らない。…わからない、まったくわからない。ただ怯えている。何時から？ 判つている。どうして？ わかつている… 判つている。全部判つている。私がしてきた事だ、全部判つている。

ただ…ただわからないのは…

「次は田白、田白」

自問自答の時間は終わりヘッドフォンに手をあてる。多分目の前の誰よりも私の時間はゆっくりと動いている、みんなそれぞれ時を過ごしている。新聞を読んだり、友達同士で憧れの先輩についてあれこれ…視線が後ろ髪を突き刺す。刹那私の身体は氷となりガタガタと頭部が揺れる。恐怖を奥歯でかみ殺し振り返る、あくまで自然に、決して目に力をこめてはならない。…子供だった。私の氷は消え2歳の女の子の隙をだしバイバイと手を振り次の車両に移った。

「む・か・し・ひーとの・じじい…」

私の時間は加速する。この車両にターゲットは存在し、この車両にいる全員が私の目撃者となつる。

「いとばひーとつ…うまれて…」

「紺のスースの男」

分っている一週間いつもこにつけはこの車両に乗り、ドアのすぐ横に座る、座れないときは田の前に立ち電車の揺れにあわせて座つてゐやつを蹴飛ばす。またくせこいやつだ。とても銀行の裏金を横領した男とは思えない。「伝えてーね、この声を」

ぬいぐるみの詰まつた紙バックに手をつっこみ、サイレンサーを取り付けた小型のピストルを…

そうこの瞬間、電車が止まる時のこの揺れ。ここにはバッグを大事そうに胸の前で抱えふんばる…〇Kいつもどうづ。私ははよたつきながらこいつに倒れる。

「へやのおもい」

走つてはならない、階段を上る時も 走つてはならない、改札をくぐる

この列…硝煙が紙バックからもれてる…へやをまるめ脇にせし、切符をポケットから取り出す。

自然でなければならない…恐怖？怒り？焦り？

怯えている？大声でわめき散らしながら逃げ出したい…走り出したい…自然でなければならない

「お疲れさま、おケイ」

真紀は明るい顔で私を迎える 安堵が漂い私も微笑み返したくなる…目をつぶり平静いや冰を取り戻すと…ゆっくりと息を吸い込み…微笑みながら目を開ける

「お疲れさま」

「こつもじりにしておくね」

「ええ、いつもどおりで」  
紙バックを渡しタクシーに乗り込む  
前しか見ない。私も真紀も進むことが……だったから。

## ルームメイト

呼び鈴で目が覚めた

まつたく子供じゃないんだからどんだけならしてんの  
髪をぐしゃぐしゃとかき回しお撫上げてソファから立ち上がった

「お帰りヨウチヤン」

「お帰りつて寝てたの」

「う、うーん」

「まつたく5分も待つたんだかね5分も」

「ゴメンゴメン」

今日もお嬢はふりふりに機嫌斜めですか。

「遅かつたじやない」飯にする?」

「いいよ、たべてきたから」

「たべてきた?」

「ど」でよ」

「思い出の場所よ」

「思い出の場所?」

「吉野家よ」

やつと笑顔で私に振り向いた。

「ああ、あそこなら年中む・ちゅ・う・だもんね」

決まった、これは決まった久々に場外いつちやたんじやない

「…はあ? それ無休だけど」

「ん?だから」

「ふりふりしてるし

「だよねー」

「まーたくおケイは、よくそんなオヤジギャグ恥ずかしげもなく堂々といえるわね。はつきりいつて寒いんですけど」

「寒い? 暖房つける?」

「天然か」

なんだかわからんないけどひこんできた

「それよりおケイ」

あつヒアコン消しちゃった

「なに?」

「今日何の日だか分つてる

「ん?」

ナニ? すんじに怒つてるんだけど... 顔は笑つてるんだけど怖いんで  
すけど...

「家賃よ家賃」

「あー」

「あつて、何あつてまさか今月も払わない気」

「うん、は、はうつよ」

ピンチ! あしたなのよねー振込み。明日つて言つたら怒るかなー 2  
00の... 来週北海道でー今月もかわむんですよ... のじつじゅー! ま  
んかー

「明日じゃダメ? ほら銀行... もうやつてないし」

「銀行? ATMあるじゃなしコンビに行けば24時間年中む・わむ・

う」

「...うんでもねヨウチヤン今月10万くらいしかなくつて」

「だから... なに。こいわよ10万で35万耳そろえては難しいの位  
わかるわよ。まさかおケイ10万使つちゃうわけじゃないでしう

ね

「払うわよ、払うつて15万ちやんと払うから

「え? 15万払えるわけ... どうこいつ」と?..」

「ん? うん」

あちやー口が滑つた、ヨウチヤンに責められると弱いんだよねー、  
お嬢怖いから... ほり、うわー ど、どしようかなーうんと、うんと  
「おケイなんで10万が15万に増えるわけ、ホントいくつ持つて  
るの」

「こ・こ・こ・」

「何について、20万あるの、本当? 本当はもつとあるの? 22万? 25万? 29万? うん? うん!」

怖いよーねずみ色のコーナーポストに追い詰められ姫は大ピンチなのだー誰かかっこいい<sup>キムタク</sup>王子様助けてー

「何であんた冷蔵庫にしがみついてるわけ」

「え! あ、え! あ、うーん恵子はやめなつて言つたんだけだね」

「だれ!」

「うん? うーん... 象さん」

「象さん?」

「そうそうクレヨン shinちゃんの象さんがね、恵子はダメだよって言つたんだけだね、象さんこんなに大きいから恵子怖かつたから。でもちゃんと言つたよ、ダメだよって、それはヨウちゃんの大事なもんだよって。でもね象さんね恵子の話全然聞かないでねー... 食べちゃつたの」

「うーん、ふー... オケイ、あんた又食べたの」

「恵子じゃないよ、恵子じゃない象さん、象さんだよ」

冷蔵庫を開けて中を見せた、これでOK

「おケイ、無いじゃない。無いじゃない! 私のプリン」

本当単純、しうがない北海道温泉は止めて銃だけ手に入れるか

「さやー、だから象さんだつて

「さやーからくるのよー、こんなでつかに象さん。ドアぶち壊れてるでしちゃうが」

「ほントみたいにヨウちゃんと私はソファーをぐるぐる回る

あれから十年私達はそれの思いと理由で、静岡を離れ東京で暮らしている。

## 前の日

「ねえおケイ」

一段ベットの上からヨウチヤンは声をかけてきた、お嬢が上で私は下なのだ

「なーに」

「明日、主役のオーディションなんだ」

「ふーん」

毎月言つてる

「今度こそ絶対受かりたいの、今までミコージカルばかりだったじゃない。今度は歌や踊りがない新劇なの」

「新劇？」

「そうしかも、浅井和則さん原作の斎藤和先生の書き下ろしの台本で、演出は小山真美先生。しかもしかも音楽はあの山田五郎さんなんだって」

誰ですかその人たちは… やまだ「うつてたしかキューpeeちゃんに眼鏡かけたよくテレビでいじられてる人？」

「… の人作曲する人だつたんだ

「それにね今日願掛けにいつたんだ」 がん・か・け?お嬢の専門用語はよう分からん

「おケイ覚えてる」

なに? 急に振つてきたけどギョウカイの事なんてワيدショーの事しか分かんないよー、私お嬢みみたいにマニアじやないし

「なに」

とりあえず答えた

「私とおケイが、東京で初めてあつた場所」

「吉野家」

「あの時私初めて並じやなく大盛り頬んだんだー、そしたら店員さん間違えておケイのとこもつてつたんだよねー」

そう大輔のおかげ、お嬢週に三回火曜と木曜と金曜ドトールのバイト終わって原宿の吉野家でお昼食べる習慣になつてゐるらしく。一ヶ月くらい私も通つてたのだが、目の前に座つても、横に座つても全然気付かなかつたわけ。

で、それを見ていた大輔が私に声をかけてきて…初めは何だこいつナンパか?と思つてたけど、結構地味なやつでさ。

今でも、お嬢の事をちくいち報告していく…いい舍弟だ、うん。

「うん覚えてる、私もまさか東京でヨウチヤンに会えるなんて…運命かなー、なーんちやつて」

真紀におばさんから住んでる場所、バイト先、通つてる学校そして連絡先、全部聞いてたからね、探すのは簡単だつたんですよ。

「うん、私も運命だと思うよ。ホントに…もしあそこでおケイに会つてなかつたら私…静岡に帰ろつと思つてたの。誰もいない東京でお芝居は上手くいかないし、バイトで忙しいし、お金無いし楽しかつたけど…ただ毎日働いてお金かせいで、高い授業料払つて、何とかレッスンだけ受けて…他の子達は公園で練習してるつてのに…一食べてやる一大盛り食べてやる一大盛り食べて静岡に帰つて、結婚しようと思つてたんだ。」

お嬢…だからあの時半べそかけてたんだ…てつきり彼氏かなんかに振られたのかとおもつたよ…?

「えー」

「何よ、大きな声だして」

「ヨウちゃん結婚しようとしてたの?」

「うん」

「誰?、ヨウチヤン高校時代部活ばかりで遊ぶの私だけだつたよねー」

イタツ、思わず飛び起きて天井のキムタクとキスしてしまつた

「ちょっと大丈夫」

「うん、大丈夫、大丈夫そんな事より誰、相手は私の知つてゐる人?、こんな事で泣いたりしません、私はプロですから」

「あーいなかつたわよ、ただあの時は結局私はただの女で、女の幸せは結婚かなーって思つただけよ」

「なーんだ」

お鼻痛いよーキムタクのバカ

「どうしたのおケイ」

お鼻痛いの

「なんでもない…頑張つてね明日の発表会」

「もー発表会の前のオーディション」

「とりあえず寝坊しないために今は寝るのだー」

「そうね、お休みおケイ」

「お休み、ミウちゃん」

お鼻痛いよー

## オーディション

次の日の朝早く、お嬢はハイテンションで起き上がつてきた

「よーし今日もモバリバリにやぢやうよーん」「うるさい朝は弱いの、無視無視、私は眠り姫

「おケイ起きたー今日オーディションだからもう行くね」

あつそうですか、どうぞどうぞおかまいなく。どうせ又生理みたいに、更年期障害のような、起伏の激しい日々が始まるんですよあなたは。あーいやだいやだ、あたしゃーさつさと北海道いって。銃、手に入れたらのんびりしてるとか、仕事どうせ半月ぐらい無いだろうし。いやなんだよねーあのどんよりとした空氣。どうせお酒ばっかり飲んで帰つてきて、可愛く食事の支度して待つ私を、昨日みたいにぼーりよくでうさをはらすんだ、つあそだスマップの、全国ツアーコンサートでも観にいーかーかな… そつすると、えつとえつと…

そんなことを考へてゐるうちに、ヨウちゃんは出てつた。

「がんばってーヨウちゃん」

ヨウちゃんは旦が昇つたばかりの朝5時半、始発の西武新宿線に乗り新宿で下りると、JRに乗り換えて原宿に向かつた。原宿駅の裏にある代々木公園に着くと、トイレでジャージに着替えた。ラジオ体操して公園を一周回り、その後腹筋、腕立て、スクワットetcこま一筋トレですな。

なんでも役者は体が基本だそうで、私から言わせてみれば役者は顔だと思うのだが…

怖くてとてもそれは言えない…まつ別に、ブッサイクつて言つ事も無いんだけど、なんていうかはなが無いって言つつか胸が無いって言うかなんにも無いって言つつか向いてないって言つつか。まー本人がや

りたといつていつてるからねー、しょうがないのかなー。

そういえばこないだ観にいつた時なんて、何処にもいなかつたし。なんかスタッフで時計もつてなんか言つてたつていうけど、私には全然何も聞こえなかつたけど。お嬢燃えてるからねいいんじゃないの私はチケット10枚2万円分買わされて…つまそれぐらいしかしてあげられないからね。

時間は朝の7時10分

そんなこんなで美しい眠り姫が、イケ面王子達にしあはやされる夢を見てる頃。かわいそうなシンデレラはバカみたいに筋トレに励んでいました。

「おはよう高次」

爽やかなガラガラ声でヨウちゃんに声をかけ、ジャージに着替えると缶ジュークをヨウちゃんに渡しベンチに座るとタバコを吹かした。このたんそくで馬面王子」と斎藤高次は今回ヨウちゃんのオーデションの相手役なのだ。

「ごめんね、今日しか時間取れなくて」

「いいよ、気にしなくつて芝居なんてその日の日で微妙に変わるんだからさ。今田のテンションが上手くいけば、それが俺達のベストだつて」

「そうね、ありがと」

ヨウちゃんは十一期制、そして馬面王子は一五期制。年はヨウちゃんが一二の馬面王子が二十一と年下の後輩なのだが、馬面王子…なんか言いにくいな王子は、いや馬面は主役こそ取つてないもののここ4年十一回の舞台で全て出演し台詞も出番もかなり多い、二、三回他の劇団の舞台にも出たりしている。その点ヨウちゃんは…うう悲しいシンデレラ

「じゃほじめよつか」

「うん」

どんなイケ面でも私の心を掴む事なんて出来ないのなぜなら私の心  
は…きやー

「ぐすん起きてしまった」

一番いいところで起きてしまった。ばかばか恵子のおばかちゃん。膨れて顔を振る可愛い姫。然し見上げるとそこには、い・と・し・の・きやー。そして姫は王子を見つめられ目を閉じる・・んー覚めちゃった、時計に目をやると11時15分…はじまつたかなあ

原宿竹下通りを500㍍位進み、左手にクレープ屋がある所を右に曲がり坂を少し登つたところウチヤンの通う劇団の稽古場があった。ここ劇団ピクニックのオーデションはなんか知らないけどめちゃくちゃ厳しいらしい。

「ハイではつきやー」

この頭のてっぺんから声を出してるオカマが大熊伝七称マリリン、この劇団の演技指導の先生で、オーデションの決定権があるエラーイ人なのだ。そして今日も今日でピターとしたピンクのラメで、キンキラのタイツって言うかレオタードって言うかとにかくキショイ。ぽつこりお腹出てて、あそこもモッコリしてる。よくこんな奴なんかに一緒に息吸えるか、理解に苦しむ。

「藤本陽子宜しくお願ひします」

「斎藤高次宜しくお願ひします」

「はーいそれでは、いきむあーすう。エンゲル係数と・うわ・とう・あ・すい。ラストスイーン、うーん、たからくじ…」  
「すーみチャン」

「何?」

「愛してる」

「…うん、愛してる」

「じゃさじやさ今夜…」

電話の呼び鈴

「ハイ桂木ですが…すみ子ですか？ハアーいますが…すみチヤン斎  
藤つて男の人」

「つえ、アーバイト先のマネージャー」

「フーン」

「ハイ鈴木です、エツ 来週ですか？来週はちょっと…」

「クアアツト…！」ブアツトブウアツトバツトマーン…！ほーんと次の悪役は誰がやるのかしら、ジムキャリーにシユワちゃんその後出てないのよねーこれって言うのが。やはりここら変でウイルスミスがジャツキーあたりにお願いして世間をアツ…！って驚かせないといけないと思うの、そうよ次回のバットマンはウイルスミスかジャツキーまたはジャツキーかウイルスミス。それぐらい大事マンブランザーズなのよー！！！」

突然のカットに二人は、その場に立ち尽くした。

ヨウチヤン曰わく、演出家様がカットを入れたら役者はその場を動かず、演出家様のイメージを損なわないよう手を付けて貰うチャンスだという事らしいけれど…恐いからビクついてアホみたいにオ力マに、あーだこーだ言われ、肩だ腰やお腹触られるなんて…キモイ…キモすぎる

「はい！」

二人は軍隊か学生のように、直立不動でポツコリモツコリを真面目に見ていた。

「なに？二人は何なの、何をしてるというの」

「はい、恋人同士で最後のラブシーンです」

「そう、そうよ恋人と同士すなわち恋人同士。ミス藤本プリティーウーマンは見た」

「いいえ」

「駄目だこりやー」

「ええ？」

「嫌駄目だ、駄目だマリリン。確かに教師生活25年、時には雨の日も風の日も会った。何度会津若松の蕎麦屋に戻ろうと思った事か、然し私はオカマ塾塾長大熊伝七である。ここで私がサイを投げてしまつては新スーパーマン2の映画化はない。そして現代舞台芸術における巨匠、林家パー子は生まれない。さあ立ち上がるのよみんなそして私と進むのあの北斗七星の横に輝く星こそ私達が目指す星、仮面ライダー～3の星なのよ」

マリリンの言葉に、劇団員全員田をキラキラさせいつ答えた。

「はい」

なんかわかんないけど、長いから次回に続くのだー

## オーディションの続き

シンデレラは王子と共に舞踏会で踊ります。然しそこに意地悪な才カマが現れてさー大変！

「いい、恋人同士というのは台詞で教えてくれます。バート然しこうがステージに上がり、スポットを浴びる。そしてお客さまの目に入った瞬間にはもう、恋人同士になつていなければならないの」

「ハイ」

マリリンの言葉に二人は答えた。

「二人の存在を恋人と表す、台詞以上の説明。それが何なのかわかりますか？」

「いいえ」

馬面高司は目を丸くし答えた。

「メニューです」

「メニュー・こん・・・ですか？」

馬面とヨウちゃんは息を会わせたかの様に答え、首を傾げた。

「そうメニュー・コンよ、すなわちアイコンタクとレンズ。空気を通すの」

「?はーあ

「さあ一人ともここにお掛けなさい」

「はい」

二人は言われるままイスに座った。

「いいですかこれではただのむかえ合つているだけの一人です。ミスター斎藤そしてミス藤本目をつぶり思い出すのです。相手とどんな風に出会い、何を語らい、なにを思い、どんな時間を過ごしてきましたか。一人が送つて来た恋の軌跡を声を出して確かめ合うのです。そして今、目を開ければめのまいいる相手が自分にとつて何なのか

…そこからです

二人とも目をつぶつたまま苦しそうに考え方をしていたが、そこは

やつぱり我らがヨウちゃんが切り出した

「私は春、いつもと同じ場所、そしていつもと同じ時間にいる彼を見ていた」

「僕はいつものように、帰る途中の乗り換え場で、春彼女の横に座つた。そしてMDの取り方に困っている彼女に、教えてあげた」

「いく単純な単語のやり取りで私は電車を下りた。そして次の日二人は同じ時間、同じホームの上にた立っていた」

「僕は彼女に気付く軽く会釈した、次の日も、次の日も・・・」

「夏の暑い日、彼は来なかつた、次の日も、次の日も・・・」

「里帰りし、僕は余つたお土産と一緒にホームの上にいた」

「私は彼を見つけると、何故か駆け足で近づき話を聞いた。彼がなぜ数日来なかつたのか知りたかった」

「僕は彼女にあまりの土産を渡しと里のことを話した。話が夢中になり、つい彼女の駅を通り越してしまつた」

「私は、彼の事をもつと知りたかった。だから」

「戻りの電車を待つ間話をした、電車が一本、また一本と流れて行く…最後の電車が止まつた」

「時間はあつという間に過ぎていつたらしい。私はすぐに彼の携帯にかけ続けの話をした」

「僕は、それから駅を四つ歩いて帰る事が多くなった。そして東京に着てから時計になつていて携帯が、しつかりその役目を果たしてきた」

「彼はお寺や神社、信長とか坂本竜馬とかそういう歴史的な事柄が好きで」「

「彼女はテニスにスキー、スポーツを挙げたらなんでもこいつて言つてた」

「私達に共通なところなど何一つ無かつた」

「ただ時間が一人を引き付け合わせていった」

「並木道がイルミネーションで飾られ、何処に行つてもクリスマスソングが流れている」

「最終の電車に乗り遅れた一人は、街灯で輝くスポットライトの中・・・初めて触れ合つた」

「人は目を開け、お芝居を始める

「すーみチャン」

「何?」

「愛してる」

「・・・うん、愛してる」

「じゃさじやさ今夜・・・」

電話の呼び鈴

「ハイ桂木ですが・・・すみ子ですか? ハアーいますが・・・すみチャン斎藤つて男の人」

「つえ、アーバイト先のマネージャー」

「フーン」

「ハイ鈴木です、エッ来週ですか? 来週はちょっと・・・電話を気にしながら新聞を読んでいるとある一覧に田が止まる

「すみちゃん、すみちゃん」

「宝くじは?」

「宝くじ? あつ テレビの上」

テレビの上の宝くじを取り、新聞と照らし合わせる

「違う・・・これも、これも、うん? すみちゃん、すみちゃん」

「えーですか? ・・・あつすいません、今料理の途中なんでその件は今度、では」

電話を切り椅子に座る

「何、当たつたの?」

「いや、違つてた」

「なーんだ」

「アーバ番号は合つてたんだけど組が違つてた」

「エッ、何等と番号が一緒だつたの」

「一等だよ一等、一億二千万だぜ一億二千万・・・当たつてればな

「ひょつとしたら」

宝くじを取り上げ新聞を読む

「あつた組み違い賞」

「くみちがいしじう?」

「一千万円だつて」

「いつ一千万!?」

新聞を見入る

「本當だ、組み違い賞。一、十、百、千、万、十万、百万、・百万

「だよそれ」

「うん? でも当たつてるじゃない。嬉しーこれ私のね」

「エツ、まつ待つてよすみちゃん。それ僕のだよ」

「私が買つたのよ」

「でもすみちゃんあの時、お金が無くて僕のお財布から半ば強引にお札三枚取り上げて…だからその宝くじは僕のお金で買つたの」「でも買おうって言わなきゃそのままこの宝くじは誰かの手に行つてたわけでしょ。そして女の感つて言つか、私のあまりの美貌にこの宝くじの方から声をかけて来たのよ」

「意見あり」

「なんですか一矢検事」

「すみ子弁護士、ここは公正明快に折半が望ましいと思われます」

「わかりました一矢検事。それは、み・と・め・ま・せん」

「では実力行使あるのみです」

じゃれあう一人、宝くじが床に落ちる 二人の手と手が宝くじの上で重なる

大事に一人の手で宝くじを掲げる

「すみちゃんこれで車買わない?」

「そうね、そうしたら色々な所行きたいわね。海とか山とか

「うん。京都とかもいいよ」

「でも明日ね決めるのは、今はもうかえられないし」

「うん、そうだね」

「ねえカズくん、私の事愛してる?」

「もちろん、愛してる」

見つめあい抱き合つ二人

「ん~オーケ~イ!!」

このオーディションで始めてのOKが出た

ミウちゃんは馬鹿に抱きついたまま肩を震わせていた

そいつは突然ヨウチヤンの前に現れた  
と言つても前々から劇団に入つていたらしい

そして良いか悪いかヨウチヤンはオーディションに受かり、主役の  
座を掴んだ

配役が決まり、顔合わせと読み合わせ時、アイツ樋口順一郎はヨウ  
チヤンに接触した

アイツは稽古を口実にヨウチヤンに近づき稽古場と称して朝、夜と  
公園やらカラオケボックスに誘い、バイト先までつきまとつていた  
らしい

そうしてアイツは日に日にヨウチヤンに近づいていった

さうに樋口順一郎は斎藤高司を取り込み、ヨウチヤンと斎藤高司を  
くつ付けさせた

まんまと私は樋口順一郎に躍らされ、斎藤高司に焼きもちを妬いた  
けれど、ヨウチヤンの幸せそうな顔に私は  
支えていたつもりだつた、オーディションに落ち、いつも泣き荒れ  
狂うヨウチヤンの傍に居るのは、私しかいないと思っていた

だけど、私には悲しみを受け止める事は出来ても、幸せを与える事  
も、共感する事も出来ない…

私はただ…だけ

そして、ついさっき30分ほど前ヨウチヤンから連絡が有り、打ち  
合わせとかで斎藤高司と樋口順一郎が来るというのだ

私は平然を装い「いいよ」って答えたものの

込み上げてくる斎藤高司への嫉妬に、BMGショートマグナムを、

分解しては組み上げ落ち着きを取り繕い、優しく笑顔で出迎えるよう頑張った

こうして私は、ドアを開け斎藤高司を笑顔で中に迎え入れる事が出来た

次に樋口純一郎と目があつた瞬間、私の防衛本能がそれを拒絶した  
「ちょっと・・・一緒にジユース買いに行かない？」

「何ですか？」

「二人きりにさせてあげましょ？」

私はあくまでも穏やかに、かつ自然に振る舞った。

「良いですよ？」

ヨウチヤンが私を見ていた事は分かつて、然し振り返るわけにはいかない殺気だつたこの顔を、ヨウチヤンに見せる訳にはいかない  
「分かりました」

樋口純一郎はニコッと笑うと観念したのか開き直ったのか私に気にぶつけてきた

2人は張りつめた空気のまま外に出た

勿論樋口順一郎の後ろに私はつく

セオリー通りアイツは階段を選ばずエレベーターに向かう  
外に出て始める自販機の前でとぼけた様にアイツはこう言つた

「何にします」

「ここじゃない

もうヨウチヤンはいない私は私の気を出す

「そうですか」

そう言うとフツとは鼻で笑い歩きだした

コンビニに入りジュースの棚の前に立つ  
「ふざけてるの」

構わずアイツはコーラのペットボトルをかごに入れレジに向かい精算をすまし外に出た

そして私達のマンションに足を向けた

「待ちな、あんた誰だ」 そつとあいつはふつと鼻で笑うと振り返った。

「聞いてないんですかさつきも言つた通り僕の名前は樋口純一郎です」

「そう言つ事じゃないでしょ」「

「と言つと」

「言いたくなければ言わなくともいい

私の気は密度を上げた

「これ以上私達に関わるな」

「意味が分からんんですけど」

樋口順一郎は目を見開き口元を上げる

「（こ）でも良いのよ」

私は殺氣を強めアイツに近づくアイツの気は所詮作り物、本物の私にかなうわけがない

「わかりましたよ、僕の名前は本当に樋口順一郎。そして察しのとおり組織の者です。真樹さんとは別に動いて貰うべく、陽子さんに近づき… つま分かるでしょ組織のやり方くらい」

樋口順一郎は目配った

なるほどコンビニに一人アイツの後ろに一台そして私の後ろのカツフルか

確かに真樹のチームとは違う

真樹のチームならインカムをしてるからすぐ分かる、然しこいつ等？なるほど… 携帯か

私がアイツの手がズボンのポケットにあるのを確認すると、樋口順一郎はポケットから携帯を取り出し、顔の前に上げ右眉を上げ顔を傾けた

「だつたら直接私に接触すればいいでしょ」

「確かに… 然しあなたは、田辺さんのお気に入りだった。そしてあなた自身それを誇りとし糧となり数々の功績を組織に上げてきた。

真樹さんも又そんなんあなたにそういう仕事しか与えてこなかつた。だから田辺さんみたく組織には深く関わらず、仕事だけを淡々とこなして行けた。そしてあなたは身の安全と自由が確保されている

「…自由ね」

私は携帯を見つめ口元を一瞬上げると樋口順一郎を睨みつけた、もう大丈夫槍でも鉄砲でもなんでも来て：全員ぶつ殺してあげるから私はチーム全員に気をぶつけた

案の定この中にヒットマンはいない、つていうかいたらとっくに気が付いてるし

田辺さんを持ち出したってことは…面倒臭いなあ

「金よ金、金のために人殺してんの。誇りだの組織の考えだのどいいの。つま真樹は組織の中にいてグチグチグチャグチャどいたらこーたら色々あるらしいけど私には関係ないし、どーでもいいこと」

ここまで言つて私は青ざめた、自分が次ぎ言つ台詞に自分自身驚いたからだ

そのショックに私の全機能は停止し、氷が私を包む

「…ま…き…なの？」

氷が私の口を固めるまえに何とか吐き出した

「違いますよ、僕はあなたの事を充分理解しているつもりです。知らないかもしけないけど組織の中じゃ結構多いんですよ、あなたのファン。まあ僕もその一人なんですがね、：そして噂の美人ヒットマンは噂が噂を呼び本人の知らない所でとんでも無いことになつている…結構組織の中で努力してるんですよあなたのために「そう言うと携帯をしまい私の後ろにいるカップルに合図し、チームは私の視界から離れた

「もつと金になる仕事しましょうよ」

なんだこいつ？樋口順一郎の気が、変わつた

「肝臓癌でしたつけ志穂果ちゃん。移植以外助かる手立てがないんですつて」

勘に触る

「海外で十億…大変だ…。人つて殺すより生かす方が、お金つてかかるんですね」「どうでもいい

「樋口くんだけ、私が人を殺すのはお金の為…そして田辺さんを尊敬してるのは…あなたの五分後を私が握れるように教えてくれた事よ」

「恐いなーだから汚い仕事でお金をあなたは貰う、そして組織はあなたの誤解も解け忠誠心も認められ、より安全安心に自由を満喫できるつていうことじやないですか」

樋口順一郎は私の顔色を伺いながら、自分の言葉に酔いしれていった  
「それに癌細胞つて、若いほど進行が早いんですつて。術後も七割の確率で再発、又は転移するつていうし。再発したら…」

うざい…！

私は樋口順一郎の言葉を断ち切った

「そこまで分かってんなら、ヨウチヤンは関係無いでしょ」

その一言に一瞬目を見開き、私の顔を凝視すると。何かを確認したのか、また口元を上げ目を細め語り始めた

「僕はあなたのファンです。あなたのためを思つて僕は陽子さんに近づきました。けれど僕は陽子さんは好きでは無い、真樹さんと違つてね。あなたは自分が思つてるよりずっと弱い。その証拠に、僕はチームを遠ざけて十分も経つているのにあなたの前に立つている。

「淋しいくせにアザケ笑つて強がつてゐる。つま簡単に言つて子供、悲劇のアンチヒロイン田中恵子さん」覚悟は出来てた  
避ける事も出来た

「僕があなたのファンになつたのは、あなたが弱いからです。あなたが一流のヒットマンになつたのは田辺さんの指導もあつたでしょ  
うが、妹さんそして陽子さんがいなければあなたは組織に入らなかつた。ヒーローも悪役も必ず弱点がある。その弱点を克服するつて  
いうのも悪くないですが、やつぱり僕等悪党は弱点を、握りちらつかせて言つことを聞かせるつてのが常套手段でしょ」

：コウチヤン

「一人共知らないんですね、あなたの仕事」

私

「何時死ぬか分からない遠い身内より、近くの大親友の方が本当は大事なんでしょ」

私は

「わかつた」

その一言に樋口順一郎の顔から笑みは消え。私の顔をじつと見つめるところだった

「行きますか、陽子さん達待つてますから」

## 自由

私は真樹に自由を与えて貰っていたのか…

樋口順一郎に比べれば真樹は…

春、真樹と一緒に上京し三人は楽しかった。

私達は女を捨て、ただの兵器になるべく、人体の急所、力加減、証拠の隠蔽…色々な事を田辺さんから教わった…朝から晩まで、毎日、毎日…

私と真樹のコンビも、田辺さんが何時も見守ってくれたから…今までこれた。今も見守ってくれてる…最低私はそう信じてる  
田辺さんは本当にすごい、キャツキャツ叫ぶ田舎猿一人をいま思え  
ばたつた一年足らずで、超一流に仕立ててくれた。

白い雪が綺麗だつた

静岡では味わう事が出来なかつた雪

田辺さんが作つてくれた大きな足跡を、二人は黙つて確認し田辺さん後に続いた。しんしんと降る雪、私がこの世界を壊す。  
一週間前から真樹に聞かされてはいた：

冗談だとばかり思つていた

然し三日間、私は田辺さんから携帯用ショートボーガンを渡された。

考へてはならない

今まで何人殺しに関わつただろう

真樹の初めての仕事は病院で寝たきりの老女

私は三輪車に乗つた男の子をお菓子で誘い、人気の少ないデパートの屋上にある貯水タンクの裏で男の子の足を掴み壁に叩き付けた：

何回も何回も…

躊躇してはならない

50メートル以内なら飛び道具に風の影響はほほない  
と言つてもあまり実践で飛び道具を使つ事はない。足がつきやす  
いし田立つ

慎重派の真樹は、トリックで仕掛け薬物で仕留める。

私は直接この手で：と言いたいが包丁やトンカチ、まつ身の回りに  
ころがつてゐ何かで殺す。

#### 指定された時刻

#### 指定された場所

#### 指定されたやり方

それが基本

何時も田辺さんが口づるべく言つていたこと  
丘の上にあるこの公園の端には、電車の音を遮るため防音の柵が張  
られ、景観を汚す事のないよう大きなもみの樹が立ち並んでる。

#### 指定されたやり方

田辺さんは今日も同じ場所の樹に寄つかかり、腕時計で時間を確か  
めるとタバコに火を付けた。

#### 指定された場所

私はボーガンの弓を引き矢をセットする

「今日こそきめろ」

そう私は失敗した…昨日も一昨日も、田辺さんは失敗を許さない。

顔は勿論、髪を引っ張り、地べたに寝転んだ私の体を蹴り続ける。泣いてもわめいても許してはくれない。

真樹は、ただ歯を食いしばって見てるだけだった。

### 指定された時刻

田辺さんの問いに応えられないまま、右耳から真樹の指示が入ってきた。

「昨日と一緒に、田の前の男」

私は奥歯をギリギリとかみしめる

躊躇してはならない

ターゲットとの距離は4メートル

ターゲットは目を閉じ腕を組んでいる

ポイントは…喉

このショートボーガンの殺傷能力は3メートルから…あと1メートル、あと一步前に進めば私は仕事場を達成でき、一千万が私の銀行に振り込まれる。

やつぱり涙があふれてきた

私は昨日、一昨日と同じようにその場に座り込む

「恵子、お前のしたいことってなんだ？妹を助ける事か？それとも結婚も出来ない女友達の陽子って奴のケツ追い掛ける事か？」

田辺さんの言葉に私の思考は完全に狂い、怒りが、悲しみが、切なさが心を飲み込み、溢れ出る高鳴りが体を突き動かした。

考えてはならない

「む・か・し・ひーとの」「ひーとの…」

矢を握り立ち上がる

「どうした？ 狂ったか」

そう私に罵声を浴びせつゝも、ターゲットは焦りの表情を隠しきれない

「こびばひーとつうまれて」

目を白黒させ私をみている。だけど体は正直ね、ほら手が樹の幹をしつかり握り絞めている。

「つたえてーねこのこえを」

なんか言つてる

でも、もう聽こえなーい

逃げるの？

でも、もう遅い

「くそのおもい」

振り向かせまに、私は背後から心臓に矢をぶち込んだ。

どんな顔してゐるのか知りたくない、私はターゲットの前に回り込んだ。するとターゲットは私に抱きつぶよつて倒れてきた。

私は力いっぱい抱きついた。

暖かかった

「ゴメンね…ゴメンね…ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい

「終わつたね」 真樹が来た

「うん」

「代わりの着替え、そしてこれは私が処分しておくれ

ボーガンを抱え、紙袋を私に差し出した。

白い世界、時間は午前五時を半分くらい回つたくらい。

このまま雪が降り続ければ、三時間ほどでターゲットを隠してくれる。

二人はもと来た道を…田辺さんが歩いて来た道を歩いた

あの日、氷の心を手に入れた私は、超一流のヒットマンとして組織の鎖に繋がれた。

身も心も組織しだい、本当の自由なんてこれっぽっちも無い。全部見せかけ、作り物…

だけど、ヨウチヤンの笑顔見ると…忘れちゃうんだなー何もかも例えそれが、作り物の世界の事だとしても

「お疲れ様」  
「お疲れ様」

何時も通りの事後報告

「今日会わない?」

「いいよ、別に」

真樹の優しい口調に、素直になれない

「明日よね」

「…来るき?」

「いいの?」

別に来ても良かつた、真樹の顔見たら、ヨウチャンどんなに喜ぶことか

「ドトール…新宿南口のドトールで一時間後」

「うん、わかった」

真樹は、本当に嬉しそうに答えた。

私は携帯を見つめ、目を細め溜め息をつく。

どうせどう動いても、2つのチームが私に張り付いている。

しかも樋口と組んでからは、部屋にまでカメラと盗聴器がここにです  
よつて、分かり易く置いてきた。

『ド変態』

私は本屋に立ち寄り、キムタクが載っている雑誌を買いまくった。  
新宿駅構内にある有料トイレに入り一番奥、入ってんじやない…  
鏡に立ちスキン手袋をはめナイフを洗い、ポシェットにいれた。  
二分後奥から頭に大きな羽根を付けた、ゴスロリ姿の女がてきた。  
夢の中ならまだしも、現実ではとてもとても…でもやるんならあん  
なパーマしないで、ストレートの前髪パツツンのほうが…でもそれ

じゃメイドか…などと考へながら、ポシェットをタンクに入れ外に出た。

ドトールの向かいにあるビルから、真樹はてをふつた。

私は軽く左手をあげ、中に入りホットカフェオレを手に、喫煙席に座る。

真樹はニコニコしながらホットティーを頼むと、キヨロキヨロしながら私の隣の席に座つた。

「久しぶり」

「えー」

二人は互いに相手のいない携帯を耳にあて、田を合わすことなく会話を進めていく。

「面倒くさいね」

「ええ」

「向かい合つて一杯お喋りしたり、カラオケ行つたり美味しい物一杯食べたりしたいね」

「気持ち悪いよ」

「気持ち悪い？」

「うん」

私は、キムタクの方が大事

「ヨウチャンどうしてる？」

「別に」

スマップじゃなく、キムタクだけの専用カレンダーが出れば良いのに。

「何にするの？」

「車」

「くるま？」

「面倒くさいなー」「もういい」

携帯をポケットにしまい本を袋に納め、私は立ち上がる。

真樹はキヨロキヨロしながら携帯を両手で握り耳に押し当て、立ち

上がつた。

私は歩き出す

どうやら別の客が待つているらしい  
店を出る… 真樹はまだ立つて席にいる

私じゃない?

角を曲がり、確認する

…? 橋口… まあどっちでもいい

私はそのまま駅に向かつた

「切ないです… 姉さん」

「ジユン」

「もう知つて… いると思つけど、僕もチーム一つもらつてね。恵子さんがヒットマン」

「ジユン」

「さすが田辺さんの教え子、噂以上の人です。対象者を物としか思わない冷酷さ、大胆かつ冷静な行動、そしてきめ細やかな計画で六が無くアクシデントが起こつても彼女なら安心して任せられる。全然一人でやつていける… すごく勉強になりますよ。ただ… 優秀すぎるところがある。組織は、危険人物として判断したみたいですよ」「組織が… だれからそれを…」

「… 父さんからね」

「パパが?」

「あー父さんだよ」

真樹は思わず橋口順一郎の顔を見た。橋口順一郎はさつきまで私の座つていた席で煙草をふかし、外を眺めていた。

「どうしてパパが…」

真樹は橋口順一郎に背を向け、カウンターを見つめた。

「さあね… ただ父さんは自己中心的だからねー 姉さんも僕も、巻き添えくらつて組織にはいったし」

「違うわ、パパは私達の事を思つて、組織から私たちを守るために

仕方なく…」

「僕も父さんからそう説得をせられた」

二人はしばし沈黙が続いた

「姉さんは、大親友恵子さんを守るために組織に入れたんですか？」  
真樹はその一言に田頭に力を入れ、必死でそれを覆い隠し平静をつくりつた。

樋口順一郎は真樹の様子を横目で確認すると、追い討ちをあてるかのように、真樹に言葉を浴びせた。

「父さんは樋口自動車を乗つ取るため、母さんに近づいた。そして自動車産業から産業用ロボット、光電池開発、通信、パソコン機器と幅広く展開し組織幹部にのぼりつめた。言い方を変えれば、うちの家族は、父さんが組織でのし上がる為の、戸籍だけの…作り物の家族なんだ。…そして僕も姉さんも父さんからしてみればただの踏み台」

「だから今度は恵子が…つてこと」

「たぶん」

真樹はホットティーに入れかきました。

「父さんからのメール…見る？ A級ランクの任務だけど」

樋口順一郎はそう言うと携帯を取り出し、真樹に送信した。

「姉さんは女だ、女は女らしくどつかの金持ちの男と結婚でもすれば？ そうすればこんな使い捨てのチンピラみたいなD級ランクの任務じゃなく、父さんみたいにS級ランクでバンバン出世すれば父さんも喜ぶって」

真樹は携帯を見つめ、高鳴る激情を必死で抑えた。そして囁くような小さな声で、弱々しくゆづくりと言葉を発した。

「ジユン」

「別に無理してやる必要はないと思つ。、恵子さんが仕事でミスを犯したわけでもないし、組織に反旗をひるがえしたわけでもない。ただ性格、素行に問題があるってことで、内容的にも問題がない訳でもないけど、特別問題視するほどの事柄じゃない。…たぶん僕達

の忠誠心があるか無いかのテスト……そう考えれば納得がいく

「やらなければ……」

「さあね、ただ僕は返事はしたよ」

「ジュン」

「最悪姉さんとまたは父さんと……なんて、醜いし、嫌だね」

「ジュン」

「さつかも言つたけど姉さん、僕と父さんは戸籍上親子なんだよ……姉さんと違つてね。だからこんなD級任務で終わるわけにはいかない。だつて父さんいつてくれたんだ、お前は特別だつて……フフだつてそうだよなー僕と父さんは戸籍上親子、例え母さんと離婚しても親子の縁はきえないんだからね」

「ジュン」

「ジュン? ジュン、ジュン、ジュンって何なんだよ何時も何時も見下したように上から物言つてんじゃねーよオレは特別なんだよ、あんたと違つてな」

樋口順一郎は外の景色を目を見開き凝視すると、突然そう叫んだ。店内にいた客、従業員達が一斉にその声に振り返つた。そして真樹もいちお密として樋口順一郎の顔を見つめた。

「あつどいつも騒がせしてすいませんでした。ちよつと仕事で嫌なことがありました」

立ち上がりペコペコと頭を下げた。

「それじゃどうも騒がせしてすいませんでした」

最後に樋口順一郎は真樹にペコリと頭を下げ、店をでていった。

真樹は携帯を置むとテーブルに置き、頬に手をあて深い溜め息をつくと、目を細め斜めにととをぼんやりと見つめ小さく何かを呟いた。

10月8日 今日はヨウチャンの誕生日

ヨウチャンは何時ものように、朝早く出て行った。

姫はしつかり8時間睡眠をとり、優雅に10時にブランチ。焼きたてのバターロールに一昨日高島屋で買った、ワンピース2500円の高級ブルーチーズをちょっと浸けて、またまた高級なインド産のダージリンに頑固親父の牛乳

うーんやはり一流には一流、適材適所、東京は食の宝庫。ちょっと奮発さえすれば、そこらの喫茶店のモーニングなんて田じやない。こんな美味しい食材をヨウチャンはただ口に放るだけ。

あーあ勿体無い、全く余裕の無い人生つてホントヤーネ。いくら体鍛えても、お日様サンサンのなかでがんばってもメラニン色素がバツチリ働いて、シミが増えるわ肌は黒くなるは熱射病になるは、胸は縮むし足は太くなるし、かわいそうに。しかも大声張り上げて酒飲んでそれじゃあ声枯れるしポリープになるよ。まったく一生懸命頑張つてそんなに早死にしたいかねーまつ何はともあれ冷蔵庫の中は、何時も体に良く美味しい物を常に置いてる。食こそが人間の基本なのだ。そして万能の薬は水！体を洗うには軟水、体に入れるときは硬水。水はあるゆる物質の媒体になり、体が勝手に要る物と要らない物を判断してくれる。

健康つて簡単なんだよ、だけど間違つた知識が入るとダイエットとか青汁とか辛い思いして…無知つて怖いね

つてな話はどうでもよくて、メンズノンノのキムタクのセミヌード

特集 ス・テ・キ

フーンシジミとワカメそしてサーフィンか…何々オフは早朝湘南…いこつかな

ニコニコウキウキ気分で確認確認 ケーキ良し、プレゼント良し、

あとは…うーん料理？

どつも包丁とかフライパンとか持つと、勝手にミニコレーシヨンかけてどうすれば華麗にカッ「良く一発でしとめられるか、こう勝手に踊つてしまふの。そして今日もなぜかお風呂場まで来てしまった。バカだと思われてるんだらうなきつと。監視カメラに向かってキメポーズをとつてゐる私。

なんか最近、このパターンが多い。ひょっとして私つて露出狂？あーあ、まついいや、台所にもどる。

まずはこの鳥さんの腹ん中にセロリと玉ねぎと…何だつけ？取りあえず葉っぱ入れとけばいいか、あとはレモンが何とかしてくれるでしょう。そんでもつて塩胡椒なすりつけて…ウンショウンショ…そんなこんなで悪戦苦闘の三時間、パエリア、鴨のロースト、ビンソワーズ、全てバージンオリーブオイルでイタリア風に仕上げました。

うんうんさすが姫さすが私、一芸に秀でた者は何事にも通じる。完璧、素敵、生きてるつて感じ。

午後3時、小雨が降つてきた。

私は雨が好きだ。

外の雑音を消し、無駄な景色無駄な予定何もかも人が作つた物など簡単に握りつぶす、平等で差別など無い自然の力、そんな当たり前のこと何時も忘れてる。何でも出来ると思いこんでいる私を雨はただ見てるだけ…部屋にいる私は何も出来ず雨を眺める…私は雨が好きだ。

午後4時ヨウチヤンが帰つてきた。

ヨウチヤンは衣装さんから借りてきた青いドレスに着替え、髪をアップするとこれまた小道具さんから借りてきたアクセサリーを付けた。

リボンにコサージュ、ガラスのピアスにネックレス…いいんだけどね…舞台用だからおつきいんだよね

鏡を見て色々聞いてくるがあんた、今ここで一だこーだ言つたつて、もう来るよ馬面と樋口。それにあたしゃー給仕で忙しいんですけど… ヨウチャン何着ても大丈夫だつて、今日の主役はドレスじやないつて

齊藤高司は腕時計、ピンクのバンドがかわいい… 確かこれってアメリカのフルハウスやつてた双子のブランドのやつじやなかつたけ。へーかつこう良い趣味してるじやん。ヨウチャン、高いんだよこれ。樋口順一郎は、今年の芸能人名鑑… なめてんのかコイツは

「嬉しいー 一人とも本当に有難う」

ヨウチャンは満遍の笑顔でお辞儀し齊藤高司に抱きついた

「で」

さすが役者さすが主役、一人には感謝のオーラを放ちつつ、背中からは私に冷たい殺氣にも似たオーラを突き刺す。

「うん?」

「おケイは?」

ゆつくり顔を振り返る。

怖いって

「ま・さ・か、無いって事無いよね」

だから怖いって

まつ計画通りだけど

「今の言葉ブレイバックブレイバック、ブレイバック

「な、なに?」

キヨトンとしてる

私はエプロンのポケットから鍵を出し渡した。

「これって…くるま?」

「そう、キー ホルダー よーく見て

「うま? そして黄色と黒のチェックカーフラッグ… これってまさか」

そう

「そう、真っ赤なポルシェ」

「ポルシェ？！」

三人は声を揃えて鍵とわたしを見入った

うんうんそうだろうそうだろう

四人は駐車場でキヤツキヤツと騒いだ

はじめヨウチヤンは盗難車と疑つてきたが、車庫証明とか見せると

安心し笑つてくれた。

狙つてたとはいえやつぱりヨウチヤンの笑顔は良い。

オートマ専用免許でもペーパードライバーであつても…あ・あれば

のる事になるでしょう…

そんなこんなの中プライズもおわり、部屋に戻つてカラオケ大会。ご近所さんの迷惑など関係ありません。いつもオーディションに落ちて荒れ狂うヨウチヤンに比べれば可愛いものです。

ヨウチヤンが五回目の蒲田行進曲を歌い始めた時、私の携帯が鳴つた。

真樹からの着信

私は部屋を出て通話ボタンを押した。

「来ちゃった」

「なんで」

「何でつて……ともだち・やしょ」

「だれと」

「決まってるじゃない、ヨウチヤンとおケイ」

「…わかった、今下りる」

エレベーターでボタンを押すと、携帯を口元にあて人差し指でリズムをとりながら、あれこれ余計な詮索をしては、それらをなるべく否定するように心掛けた。

エレベーターのドアが開き私はロビーにでた。

真樹は外で選挙広告のチラシを見ている。…不自然だ…そんな奴はない。このマンションの入り口かエントランスで、このひどいザンザン降りを雨宿りしている方が自然なものを…めんじくせこ

「真樹」

「おケイ」

真樹は縁にレースのあるチャラチャラした赤い傘を上下に揺らし歩いてきた。

「…なに?」

「バラ」

胸元一杯に色とりどりのバラとかすみ草の花束を、真樹は大事そうに持っていた。

「おかしい…

「へん?」

自分で言つた

「変」

愛の告白じゃあるまいし…色こよひて意味も変わるんだっけ  
「ダメ?」

駄目だ

「私から渡しとく」

一人?…雨で全然わからない。

私は神経を研ぎ澄まし気配を読み取りながら、真樹にゆっくりと近づいた。

「何で?」

私が聞きたいわよ、ずっとガンとばして…ちから入りすぎ  
それに…花束握ってる手、親指見えてないし…下手すぎ、それじゃ子供でも分かるよ

銃?ナイフ?何でも良いよ、殺れるんならね  
久しぶりに熱く白い炎が私に灯った

「私と話すのだけじゃ駄目?」

まずは説得

一步前に出る。

真樹は後ろに下がり首を横に振った。

フーン…外か

確かにここじゃ何時住人が来るか分からぬし、監視カメラもあるしね。

「真樹今日は駄目、私も真樹も」

今日はヨウチヤンの誕生日…真樹、あんたらしくないよ…直接手出すなんて…

一步

真樹は花束を両手で握り、外に出た

銃!

そういう事

一昨日からこのマンションの両サイドは水道とガスの取り替え工事。住人しか入って来られない。

…しようがない

私は入り口の自動ドアをぬけた  
雨と工事の音がうるさい

真樹は反対のビルを背に私を見つめる…といつよりガンをたれてる濡れるの嫌なんだよね…まつ計算に入ってるんだろうけど

「あんたに私は撃てない」

私の言葉に真樹のスイッチが切り替わった。  
落ち着きと冷徹な眼差しで、ゆっくりと花束を地面に置くと空を見上げ立ち上がり雨を気持ちよさそうに両手を広げ受け止め微笑む、そして足を組み替えコルト532RSを私につき付けた

悲しい顔の真樹

最悪なパターン、私はその優しさの前では無力…よく分かつてんじやないの。

私を殺すことが出来るのも、私を殺して良いのも…あんただけだ  
「どうしたの、何があつたって言うの…昨日だつて私達上手く仕事をしてきただじゃない」

「なんで」

真樹は細い声でそう言った

「なに?」

工事してようが雨が降つて、ようがちゃんと聞こえてる  
聞こえなくても口ぐらい読める

「なんでミウチャンなの…私じゃ駄目なの  
周りに殺氣は無い

自分の手でか…

プライド…でも今日は駄目

「聞こえない、もつと大きな声で言つてよ。それとも私がそっち行こつか？」

叫べばとつあえずスッキリするでしょう

真樹はニシ「リわらうと冷たい眼差しで叫んだ

「なんでヨウチヤンなのよ」

やつぱりバレバレか私の考えなんか、さすが相棒

え！？

真樹あんたもしかして

「昨日樋口となに話したか知らないかど、なんでヨウチヤンなの」  
そう叫ぶと私はマンションに体を向けた。

シュン

弾丸が足下に走った

「おケイ…終わりよ」

優しい言葉が私を包んだ

けどね真樹、あんたがどんなに強くても…あんたがどんなに恐ろしい人でも、そして何時も私を守ってくれても…今日は

「真樹おかしいと思わない、大声張り上げても、いくらサイレンサー機能付きの銃ぶっぱなしで誰も気付かないなんて」  
真樹に背を向けたまま私は真樹に確認した。

「そうね…工事してるし雨降つてるからね今日」

真樹！－！

「真樹！－！」

振り返る

激しく怒りに満ちた私を、真樹は冷たい眼差しで優しくそして心地よい温もりで抱きしめるかのように、私の立ち上る熱い炎を冷たく

受け止める。

「行かせない」

「なんで」

声を荒げ雨の中に入る

分かつてる

わがままを言つてるのは私、  
何時もそうやって逃げてきた

ヨウチヤンを護るために

それを理由に、自分を正当化し取り繕つてきた  
分かつてる、組織は甘くない、真樹にも限界がある

わかつてる、わかつてる、わかつてる…！

わたし…私がヨウチヤンに…ヨウチヤンの…そばに…いなければ…  
いいの

…でも…でも

でも私の理屈は私の感情を抑えることは出来ない。

「おケイ、ヨウチヤンに入れ込みすぎなのよ」

そうかもしね

「だから」

「…だから…だからこいつなつてゐる。もつちよつと頭使つて私や  
組織にいい顔してよ」

そうかもね

「同じでしょ」

「何が？」

「私がヨウチヤンのほう向いても、真樹のほう見ても、組織に体預  
けて誰かに抱かれて…いざれ…なるんでしょ」

「さあ、私は組織の中に入つてのけど誰とも寝て無いわ。ちょっと  
は期待したけど、地味な事務仕事ばっかりよ」

「そりなんだ」

「そう」

「選択…間違えたのかな」

「たぶん」

「やり直し…出来るかな」

「それは…駄目だと思う」

「なぜ?」

「私が…今決めたから」

「そう

「そう」

私達はお互い銃を取り合いながら会話を進めていた。一人の服は血と泥に塗れ、私の顔は腫れ上がり鼻と口からドロツとした血が止まらない。真樹は綺麗なもの、私にヘッドバッジしたおでこがチョット赤いだけ。

だから私の上司なんだけれどね。

殺らなきゃ…駄目?

「む・か・し」

真樹は私の頬を殴つた

「草の想い…中学の時三人で見た映画、『ふたり』だつてタイトルそのテーマソングよね。あの映画見たあとずっとおケイ何時も口ずさんでたよね。そう何時も何時も、バカみたいに…シンナーやつて先輩に犯されてる時も…口に突つこまれてる時も泣きながら歌つてたね。まつ私は好きだつたから楽しんでたけど

下を見る…私の鼻から血がポタポタ落ちて…それが流れしていく

「トランクススイッチ…過去のトラウマから逃れるための記憶の封印、そして自分が危険と判断した場合それを回避する力。その力と精神状態を引き出す鍵、それが草の想い…でしょ」

塊の血全然流れていかない

「ヨウチヤンはね…」

血が、血が、流れていかないよーーー！

「ヨウチヤンは何にもしてくれないの…いつもお酒飲んで私にあたるの、毎日美味しい物作つても『美味しい』って言ってくれないの、真樹が用意してくれたマンション家賃だって言って積み立ててる事も知らないの」

「だつたら私がいるじゃない私が…」

うん、だけど真樹は私に銃を向けてるよ

それに

「ヨウチヤンには私が必要な、私がいないとヨウチヤンは…」

「おケイ、子供じゃないの私達は…わかってるでしょ」

わかってる

「でも…」

顔を上げ銃口に親指を入れ、真樹から銃を奪つた

バーン

私の右肩は真っ赤に染まつた

「ジュン

なにこれ？

「やつぱり姉さんには無理か」

「ジュン

「さつもう終わつた

「もう…終わつた？

痛みと痺れの中必死で今までのやり取り、状況を確認し分析し直した：

わたしか

「そいつはもう使えない、姉さんにやられるくらいだからね  
バカ

「樋口……こんな所撃つたって人は死なないの。ちゃんと真ん中狙わないと」

私は振り返り樋口順一郎に近づきながら左人差し指で額から臍まで正中線をなぞった

なに格好着けてんだろう私……

泣き出したい

生きたい

醜くても良いから

今ここで倒れちゃえば……

だけど……

私は銃口は真樹に向けたまま樋口順一郎に歩み寄る。

樋口順一郎は私の睨みに負けている。

最後の夜楽しかったよ……単純にセックス楽しんだね、愛してるだ君しかいない貴方しかいないなんて、本気で嬉しかったし本気でそう思つたよ。

もう……駄目……なんだよね

「樋口くん、おケイいた」

バン

「ま・き・?」

A h - i

バン バン バン バン

両腕両脚を撃ち抜いた

「ジユン」

バン

駆け寄る真樹に背を向けたまま撃つた…別に当たつて構わない  
来るな！

「何故、なぜヨウチヤンを撃つた」

達磨になつた樋口順一郎の顎を蹴り上げ、仰向けになつた体に跨る  
と、喉元に銃口をつきつけた。

「姉さんと…お前のためさ。組織はお前の素行に問題、つまりあの  
女が原因で組織を裏切ると判断した…實際こうだろ」

「だから」

「3ヶ月調査した、結構良い報告挙げたんだけどね。…姉さんの愚  
痴が結構効いててね…」

そう

私は樋口順一郎の銃拾い真樹に向けた

「む・か・し・ひーとのじじひー」

「おケイ止めて」

「言葉・ひーとつ生まれて」

「そ・組織を敵にする気が」

「つたえてーねこの声を」

バン バン バン

終・演・か

「草の想い」

「消去…完了」です

斎藤高司は四人の体を確認すると、向いのビルを見つめ携帯で報告した。

「(イ)苦労」

「責任問題になりませんか?」

「そうだな」

バーン

「君の単独テロは、私のチームが最小限の犠牲で阻止した」  
「そうですか、貴方はあくまで…有り難う御座います…」

五人の若者は幸せそうに、道端で眠りについた。  
雨は何も云う事はなく、ただ降っていた。

## エンゲル係数と私

照明がつき丸いイタリア調のテーブルに向かい合つ二人

「すーみチャン」

「何?」

「愛してる」

「・・・うん、愛してる」

「じゃあじゃさ今夜・・・」

子供っぽい仕草に優しく見守る

そして効果音

「ハイ桂木ですが…すみ子ですか? ハーーいますが…すみチャン斎

藤つて男の人

ぶつきりぱつに受話器を渡す

「つえ、あーバイト先のマネージャー」

「フーン」

そう言つと少刻みに首を何度も横に振り、ウンウンて頷いて振り返

り一步進むと又首を横に振り…確認

そわそわしながらテーブルに向かう

台本にあるト書き

どう見てもそれじゃミニスター・ビーンだちゅうのうざすぎ

「はい鈴木です。来週ですか? 来週はちょっと…」

台詞はここまで後は何時もアドリブ、毎回かえる。そしてその都度

ちゃんと一矢はリアクションして応える

そして新聞、バサバサ音立ててじっくり眺めて

「逆か」

静かな客席

すべつてるじゃない

だから舞台でそんな細かい芸しても、分かるわけ無いでしょ

つたく一緒にいる純子まで被害被つてゐる  
「すみちゃん、すみちゃん。宝くじは？」

「宝くじ？あつテレビの上」

どこから持つてきたか昭和の縁の14インチテレビ、宝くじはテレビの上にある家庭内アンテナの下。

一矢は宝くじを取ると新聞と照らし合わせる

「違う・・・これも、これも、つん？すみちゃん、すみちゃん  
「えーですか・・・あつすいません、今料理の途中なんでその件  
は今度、では」

電話を切り一矢に歩み寄る純子。

ここからが純子の見せどこの

「何、当たったの？」

「いや、違つてた」

「なーんだ」

「アーッ番号は合つてたんだけど組が違つてた」

宝くじを取り上げ純子は舞台全体を動き回る

「ヒッ、何等と番号が一緒だつたの」

「一等だよ一等、一億二千万だぜ一億二千万・・・当たつてればな

新聞も取り上げテーブルをぐるぐる回る

「本當だ、番号合つてるじゃない」

純子は一矢に後ろから抱きつき頬を含わせる。

こうじつた大胆さは男には出来ない、女の特権なのだ

「だ、だろ」

振り向けない…チューしちゃうもんね

「でも」

「でも？」

「組違い賞つてあるんぢやない…ほりあつた組み違い賞」

「くみちがいしちつ？」

「一千万円だつて」

「こつ一千万！？」

純子は新聞をテーブルに置くと舞台中央に立ち宝くじを両手でもつて頭を傾け微笑む

「 本當だ、組み違ひ賞。一、十、百、千、万、十万、百万…百万だよそれ」

「 うん?…百万?でも当たつてるのはねー。嬉しーこれ私のね」

「 ここからがいいんだよね二人とも

「 ハツ、まつ待つてよすみちゃん。それ僕のだよ」

「 違うわよ、私が買つたのよ」

「 でもすみちゃんあの時、お金が無くて僕のお財布から半ば強引にお札三枚取り上げて…だからその宝くじは僕のお金で買つたの」「 でも買おうって言わなきゃそのままこの宝くじは誰かの手に行つてたわけでしょ。そしてこの宝くじは女の感つて言つか、私のあまりの美貌にこの宝くじの方から声をかけて来たのよ」

「 意見あり」

「 なんですか一矢検事」

「 すみ子弁護士、ここは公正明快に折半が望ましいと思われます」

「 わかりました一矢検事。それは、み・と・め・ま・せん」

「 では実力行使あるのみです」

じやれあう一人、宝くじが床に落ちる 一人の手と手が宝くじの上で重なる

大事に二人の手で宝くじを掲げる

「 すみちゃんこれで車買つよ」

「 そうね、そうしたら色々な所行きたいわね。海とか山とか」

「 うん。京都とかもいいよ」

「 でも明日ね決めるのは、今はもう遅いし」

「 うん、そうだね」

「 ねえカズくん、私の事愛してる?」

「もちろん、愛してる」私のあまりの美貌にこの宝くじの方から声をかけて来たのよ

見つめあい抱き合つ二人

カーテンコール

拍手が鳴り響く中壇上に上がり純子に花束を渡す

「ヨウチャン」

「よかつたよ、おケイ」

みててくれたんだ

がんばつたよ…わたし

「高司も」

斎藤高司とヨウチャンは見つめ合つ

「あーらミス藤本体大丈夫なの?この子田中恵子さん、この劇場の偉い人が紹介してくれたの」

「とてもすばらしい演技でした」

「有り難う御座います。お体が宜しければ明日からはお願ひします

「え?」

「ミス藤本もう大丈夫なんでしょ、さつ最後のダンスよ出来るわね

「あつはい」

「いくわよミュージックスタート」

目を丸くしてキヨロキヨロしてヨウチャン

マリリン強烈だからね

「ヨウチャン踊る?」

「うん」

五人の若者はここに再び募つた

七色に変わる舞台

やつぱりヨウチャンには適わない

ヨウチャンの笑顔が一番好き

昔ひとの心に

言葉ひとつうまれて  
伝えてね この声を

草の思い

風にこの手かざして  
見えない森訪ねて  
あなたの唄を探して  
かくれんぼ

わたしの足音を聞いてね  
確かに眉を見てね  
そしていまは  
言わないで

ひとり砂に眠れば  
ふたり露に夢見て  
よろこびとかなしみの  
花の宴

時は移ろいゆきて  
ものはみな失われ  
朧に浮かぶ影は  
ひとの想い

いまは遠い心に  
寂しく憧れ来て  
あなたの夢にはぐれて  
かくれんぼ

わたしの唄声を聴いてね  
遙かな笑顔見てね  
そしていまは  
抱きしめて

時は移ろいゆきて  
ものはみな失われ  
朧に浮かぶ影は  
草の想い

ひとり砂に生まれて  
ふたり露に暮らせば  
よろこびとかなしあの  
花の形見

終わり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8069e/>

---

草の想い

2010年10月11日12時44分発行